

## 『往生要集』に見られる源信の念仏観 ——念仏のパラダイムとしての五念門——

ロバート F. ローズ

恵心僧都源信（942-1017）によって985年に著された『往生要集』は日本における浄土教の発展に大きく貢献した論書である。そのなかで源信は、まず「浄土教的宇宙観」ともいうべき世界観を提示する。つまり、「遠離穢土」と題された第一章（大門第一）のなかで、六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天）それぞれの苦の相を克明に描写し、六道輪回の世界は甚だ厭うべきものであることを力説し、つぎの章（大門第二「欣求浄土」）のなかで、極楽世界の楽を十種類挙げ、極楽往生を願うことを読者に勧めている。

そこで問題となるのが、いかなる行をもって浄土往生の行とするか、ということである。源信は天台宗の僧侶であったため、天台宗所依の經典である法華經に見られる万善成仏の説に従って、『法華經』を初め様々な經典や真言の読誦を含めた色々な行によって極楽浄土に往生することができると述べている。しかし同時に彼は「往生の業には念仏を本となす」と論じ、念仏こそが浄土往生にもっとも適した行であるという結論に達する。それは念仏が誰でも、いかなる時にでも行うことができるからである。

では源信は念仏をどのように理解していたのであろうか。本論文のテーマである。それを解明するにあたり、『往生要集』の第四章（大門第四「正修念仏」）の中に見られる源信の念仏観を取り上げた。この章で源信は世親の『浄土論』にしめされる五念門の組織をもって念仏を説明している。この五念門とは（1）礼拝門（2）讚歎門（3）作願門（4）觀察門（5）廻向門の五門である。つまり源信にとって念仏とは（すくなくとも論理上は）この五の要素を含む総合的な行であったのである。

本論文では、源信の念仏観を彼の五門の解説に従って考察するが、特に注目

すべきは、多くの場合、源信の各門の解説が世親の『浄土論』の中に見られる対応部分と異なる点である。『浄土論』の五念門と『往生要集』のそれとを比較検討することにより、源信浄土教の特色が現れるのではないかと思えるので、その点に留意しながら、論文を進めた。